

## 黒船の来航

### 〈解説文〉

図A 亜墨利加水軍艦提督

ペリリ省像<sup>(註)</sup>

図B 亜墨利加軍艦

副将 アロタスン

図C 嘉永六丑六月二日渡来<sup>(ママ)</sup>

同月十三日退帆

見物人は皆諸侯より遣はされし先手衆、異人上陸四百人許り、軍列訓練終り、十六人衆人を出して礼樂す、而して後、本使・副使及廿五将、帝王の印書を呈す、浦賀奉行戸田伊豆守・井戸鉄太郎  
兩人、下曾根氏は大砲の師たり

### 〈読み下し文〉

図A アメリカ水軍艦提督<sup>ていとく</sup>

ペリリ肖像<sup>しょうざう</sup>

図B アメリカ軍艦

副将 アロタスン

図C 嘉永六丑六月二日渡来<sup>かえい</sup>

同月十三日退帆<sup>たいほ</sup>

見物人はみな諸侯より遣わされし先手衆、異人上陸四百人ばかり、軍列訓練終わり、十六人衆人を出して礼樂す、しかして後、本使・副使及び二十五将、帝王の印書を呈す、浦賀奉行戸田伊豆守・井戸鉄太郎<sup>うらがふぎよう</sup>  
兩人、下曾根氏は大砲の師たり<sup>しもそね</sup>

### 〈用語の解説〉

- ・水軍艦提督。ペリリ：東インド艦隊司令長官ペリー提督。
- ・軍艦副将アロタスン：副官アダムス参謀長。<sup>さんぼうちよう</sup>
- ・六月二日：嘉永六（1853）年六月三日の誤り。

## 〈解説〉

「太平のねむけをさます上喜撰（蒸気船） たった四はい（杯）で夜もねられず」は、黒船の来航を詠んだ狂歌である。

嘉永6（1853）年6月3日、黒船4隻が突如浦賀沖に姿をあらわした。黒船は防水・防腐のコーラルを塗ったために黒く見える大型帆船のことで、唐船と区別するためにこう呼ばれていた。来航した蒸気船は2隻、艦隊司令長官ペリー提督が乗船するサスケハナ号とミシシピ号で、あとの2隻は帆船軍艦である。似顔絵には「亜墨利加水軍艦提督ペルリ」とある。

伊那郡上穂村（駒ヶ根市）の大沼勝治は6月12日の日記に次のように記している。

江戸へ唐船着之風聞、尤いゝ田（飯田）様・高遠様御家中方大勢、右二付御出府、江戸殊の外騒々敷風聞有之候（大

## 沼日記）

黒船来航の情報が、この地にも伝えられていた。知らせを聞いた飯田・高遠藩の藩士が出府したとも記している。

当時の瓦版や錦絵には珍奇なペリーの肖像が描かれている。

「色が白く鼻が高く鼻筋が額より通っていて、下は白目がちで瞳と眉が赤く、歯は細かくて牙がある。耳が大きくて髪の毛が薄

く白髪が混じり渦を巻く」と記され、天狗に似せたものなど、さまざまな肖像が描かれた。模写したものと思われる。副官アダムス参謀長の肖像に描かれているのは肩章であろう。

絵図は6月9日、浦賀近くの久里浜にペリー一行が上陸したときの配置図である。海上には会津・忍藩、陸上では川越・彦根藩が警備にあたっていた。三千人が警護にあたったといわれ、そのほかに見物人も多数いた。

停泊中の黒船から14艘の小船に乗って「四百人ばかり」が上陸した。「十六人衆人を出して礼楽す」は、随行した少年鼓笛隊のことであり、このとき「ヤンキー・ドゥードゥル」を演奏したという。日本では「アルプス一万尺」で知られるメロディーである。

ペリー一行は幕が張られた接見会場で、フィルモア大統領の親書を手渡した。親書を受け取ったのが浦賀奉行の戸田伊豆守氏（よし）と井戸石見守弘道の両名である。「下曾根氏は大砲の師たり」は、浦賀奉行所砲術師範で当日屋外警備にあたっていた下曾根金三郎のことである。

幕府は開国を求める親書を受け取り、翌年の返答を約束して帰国させた。翌年1月、ペリーは再び浦賀に来航した。条約の締結を強硬にせまり、幕府はついに日米和親条約に調印した。

【参考文献】

- ・ 中田節子『江戸びとの情報活用術』教育出版
- ・ 笠原潔『黒船来航と音楽』（歴史文化ライブラリー）吉川弘文館
- ・ 小西四郎監修『図説・黒船の時代』河出書房新社
- ・ 岩下哲典『《金海奇観》と幕末日本』中央公論美術出版